THE YOMIURI SHIMBUN

讀賣新聞

2014年(平成26年)
9月15日月曜日
敬老の日

地球を読む

『昭和天皇実録』が完成した。目次・凡例を含めて全61冊、1万2000ページの分量を誇る。『日本書紀』から『日本三代実録』に至る六国史の伝統を受け継ぎながら、『明治天皇紀』はじめ近代の天皇実録の叙述様式を継承した編年体史である。1990（平成2）年から編修作業に携わってきた宮内庁書陵部の労を多としたい。

山内 昌之
東京大学名誉教授

昭和天皇実録

歴史全体を俯瞰する意義

二つの大戦と冷戦を経験し、二つの憲法で君主と象徴であった昭和天皇は、年号では64年の長きにわたって在位した。その実録は、日本史だけでなく世界史の研究でも重要な史料になるだろう。

実録は、1901（明治34）年の昭和天皇の誕生から89（昭和64）年の崩御まで87年間を記述する。凡例によれば、第一に天皇に関する事項を「ありのまま」に叙述し、第二に皇室全般や政治・社会・文化・外交についても天皇の関わりを中心に記している。叙述にあたり、侍従日誌や内舎人日誌をはじめお手元文書などの史料3152点に依拠し、うち新発見の史料は約40点である。幼少期の手紙・作文や鼻の手術の詳細、2・26事件をめぐる重臣の動き、戦時中の伊勢神宮参拝で奏した御告文、終戦の御前会議の日時、新たな拝聴録の存在など、新事実も紹介されている。

叙述スタイルは、昭和天皇一代の歴史を扱う点で、一つの王朝について記す断代史に分類できよう。昭和天皇を「主語」とし、起こった事を時系列に沿って記録する編年体を採用している。編年体は、中国の『春秋』に始まり、日本書紀などの正史や『水鏡』『増鏡』が歴史を描く方法として採用したものである。トゥキジデスの「ペロポネソス戦争史」も基本的に編年体といえるだろう。

一般に編年体史は、扱う史実に価値の優劣や判断をつけずに、年代順に幾らでも事象を記述できる反面、因果関係をもつ歴史事象が年月日など時間の順序に規制され、ばらばらに裁断されて叙述されがちである。事象の間にある関連やその意味を見失い、歴史の全体像を理解できない危険性も出てくる。これは、年代記から発展した編年体史の欠点かもしれない（稲葉一郎『中国史学史の研究』）。

そこで実録は、特定の出来事について、その顚末を1か所にまとめて叙述する紀事本末体に類似した形式も併用した。紀事本末体とは、南宋の歴史家の袁枢による『通鑑紀事本末』に由来する言葉である。袁枢は、編年体史の代表作品、司馬光の『資治通鑑』の内容から共通の事象として重要な項目を、時間の隔たりと関係なく抜き出し、歴史の全体性を俯瞰できるように工夫したのである。

＜2面に続く＞

地球を読む

1面の続き

平和と協調目指す姿 強調

実録の紀事本末体で重要な一例は、宮内庁長官富田朝彦の拝謁を受けたという1988（昭和63）年4月28日の記述であろう。これは、3日前、25日の宮内記者会の質問に、「何といっても一番いやな思い出」は第2次世界大戦だと答え、同日の実録に記載した点と関係している。

28日の実録は、天皇が富田に対し、「いやな思い出」や、靖国神社のA級戦犯合祀と自らの参拝について述べたことを記している。

ただし、具体的な中身には触れていない。だが、「なお」という但し書きを使って、2006（平成18）年7月20日に日本経済新聞が「富田メモ」を報道した史実に触れている。

山内昌之氏　1947年、札幌生まれ。カイロ大客員助教授、ハーバード大客員研究員、東大教授を経て明治大特任教授。最新著に近刊「歴史とは何か」（PHP研究所）。

つまり、昭和天皇が靖国参拝について長官と会話した史実を記録する箇所に、18年後の報道事実を合わせて記録しているのだ。

実録編修者は、靖国参拝に関連する事柄を扱う場合に、単純な編年体叙述でなく、紀事本末体がふさわしいと判断したのだろう。ただ、富田メモの内容、そこにおける天皇発言の詳細については、一切触れていない。これは昭和天皇実録の記述に際して、複数の文書や証言の支えが乏しい一史料を、重要な政治外交問題を左右しかねない独立の材料として使わないという慎重さの表れなのだろう。

歴史の事象は無数にある以上、どの時代の歴史家や修史官も自らにとって歴史的な価値や意味をもつと考えた史実を採用する。昭和の戦前と戦後にまたがる実録を成立させる枠組みは、大きく2点に収斂すると思われる。

第一は、戦前と戦後を通して昭和天皇が平和主義と国際協調を目指した人物であり、第二は帝国憲法と日本国憲法の差異にかかわらず、基本的に憲法に忠実な立憲君主あるいは象徴だった点を強調することであろう。戦後の編年記述はいずれもこの2点を軸にしている。戦前でも、皇太子時代の欧州訪問が丹念に描かれ、張作霖爆殺に関連する田中義一首相への叱責や満州事変不拡大への強い信念、天皇機関説論争への微妙な立場などが詳しく記されている。とくに陸軍の天皇無視の記事は驚くほど多い。

昭和天皇がこの2点に基づき明治天皇を尊敬し、その治世を範とした証拠として、日米開戦の危機が迫ると御前会議で明治天皇の御製を読み上げ、平和を求めた41（昭和16）年9月6日の出来事や、開戦の詔書に戦争が自分の意志でない旨を盛り込むように希望した結果「豈朕カ志ナラムヤ」と表現されたこと（同12月8日）が記載される。

戦後も、46（昭和21）年元日のいわゆる人間宣言において、昭和天皇は明治天皇の五箇条の御誓文を挿入することを希望したが、この条では、77（昭和52）年8月の記者会見の内容が紀事本末体で示される。それは、五箇条の御誓文を挿入した理由について回想した箇所だ。民主主義の精神は明治天皇が採用したもので、外国から輸入されたものではないという内容である。

他方、実録は、立憲君主として戦争を回避する外交努力に熱心だったと記述する。平和主義者にして立憲君主たる姿を昭和天皇に求める実録は、45（昭和20）年9月27日のマッカーサーとの第1回会見に関しても「なお」と紀事本末体を使う。すなわち天皇が戦争に伴う全責任を取ると発言したとする史料と、日本の軍人と政治家の行為にも直接に責任を取ると発言したとする史料も紹介している。

また、終戦前後にしきりに退位の意志を側近に伝えたとの記述もあるが、実録はあくまでも天皇の心中には入ろうとしない。

編年体史は、価値判断や因果関係の分析を差し挟まない点で、天皇実録の性格に適合した叙述方法なのだろう。それでも、実録の編年記事を丹念に追えば、編修者たちが叙述で遠回しに語る「微婉」や、すぐには分からなくても読みこめばなるほどという「志晦」もあるのではないか。こうした予感をもって、「史料集的性格を併せ持つ編纂物」（宮内庁）として実録を熟読するのも、個別を介して普遍を学ぶ歴史の醍醐味と言うべきであろう。

英文は17日のジャパン・ニューズに掲載する予定です